広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	虚構性への模索 ： 対関係のしくみを見抜くその発達
Author(s)	竹村，房代
Citation	児童の言語生態研究 , 5 : 27 - 31
Issue Date	1972-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045056
Right	
Relation	

本会共同調査と研究報告(3)

虚構性への模索

—対関係のしくみを見抜くその発達—

（原稿整理担当）　竹村房代

われた　茶わん

ごはんの　茶わんが　われたので、ごみための わきに　すてられました。だれが、こんな　いい 茶わんを　わって　しまったのでしょう。ごはん を　食べながら、よそ見を　して　いて、茶わん を　手から　おとした　子が　いたのでしょうか。

われた　茶わんの　一つの　かけらには、ラッ パを　ふいて　いる　犬の　絵が、かいて　あり ました。もう　一つの　かけらには、ダンスを して　いる　ねこの　絵が、かいて　ありました。

ラッパを　ふいて　いる　犬と、ダンスを　し て　いる　ねこは、もとは　一つの　茶わんに、 ならべて　かいて　あったのです。茶わんが　わ れたので、はなればなれに　なったのです。

「ぼくが　ラッパを　ふいても、ねこが　ダンス を　しなければ、つまらないや。」

と、ラッパを　ふいて　いる　犬は、いいました。

「わたしが　ダンスを　しても、犬が　ラッパを ふかなければ、つまらないわ。」

と、ダンスを　して　いる　ねこは、いいました。

「つまらない、つまらない。」

「つまらない、つまらない。」

その　うちに、雨が　ふりだしました。ザーザ ー　われた　茶わんの　かけらの　上に　ふりま した。雨に　ぬれても、茶わんの　犬の　絵は、 きえません。ねこの　絵も、きえません。よごれ が　とれて、はっきりしました。ラッパを　ふい て　いる　犬は、雨に　ぬれても、ラッパを　ふ いて　いました。ダンスを　して　いる　ねこは、 雨に　ぬれても、ダンスを　して　いました。

すると、そこへ　犬が　来ました。茶わんに かいて　ある　絵の　犬では　ありません。ほん とうの　犬です。大きな　のら犬が　来たのです。

のら犬は、はなを　ひくひくさせながら、茶わ んの　かけらを　かぎました。

「ふん、なあんだ。かけた　茶わんか。」

と　いいました。

「犬さん、犬さん、ラッパを　ふいて　ください。」

と、かけらに　かいて　ある　絵の　ねこが、い いました。

「わたしが、ダンスを　しますから。」

「なんだって。ラッパを　ふいて　くれだって。」

と、のら犬は　いいました。

「おれは、ほんとうの　犬だ。ほんとうの　犬は、 ラッパなんか　ふかないんだ。それに、ほんと うの　犬は、ねこが　きらいだ。ごはんつぶ 一つ　ついて　いない　茶わんの　かけらなん かに、用は　ないんだ。」

そう　いって、行って　しまいました。

しばらく　すると、こんどは　ねこが　来まし た。茶わんに　かいて　ある　絵の　ねこでは ありません。ほんとうの　ねこです。大きな　の らねこが　来たのです。

のらねこは、のどを　ゴロゴロ　ならしながら、 茶わんの　かけらを　かぎました。

「ふん、なあんだ。かけた　茶わんか。」

と　いいました。

「ねこさん、ねこさん、ダンスを　して　ください。」

と、かけらに　かいて　ある　絵の　犬が、いい ました。

「ぼくが、ラッパを　ふきますから。」

「なんだって。ダンスを　して　くれだって。」

と、のらねこは　いいました。

「おれは、ほんとうの　ねこだ。ほんとうの　ね こは、ダンスなんか　しないんだ。それに、ほ んとうの　ねこは、犬が　きらいだ。ごはんつ ぶ　一つ　ついて　いない　茶わんの　かけら なんかに、用は　ないんだ。」

そう　いって、行って　しまいました。

「ほんとうの　犬や　ねこは、なんて　いじわる なんだろう。なぜ　食べる　ことだけしか、考 えようと　しないんだろう。」

と、茶わんの　絵の　犬と　ねこは、思いました。

「あんな　犬や　ねこが、ほんとうの　犬や　ね こなら、ぼくたち、絵の　犬や　絵の　ねこの ほうが　いい。」

と　思いました。

「ぼくたちは、絵の　犬や　絵の　ねこに　生ま れて　きて、よかったね。」

と、絵の　犬が、絵の　ねこに　いいました。

「そうよ、そうよ。ほんとうに　よかったわ。」

と、絵の　ねこも、いいました。

「わたしたちは、いつだって　なかよしで、ラッ パを　ふいたり、ダンスを　したり　して、い っしょに　くらして　きたんだわ。それなのに、 こんなに　われて、はなればなれに　なるなん て、かなしいわ。かなしいわ。」

そう　いって、絵の　ねこは　なきました。と いっても、ほんとうは、雨の　しずくが、茶わん の　かけらを　ぬらして、ぽろぽろ　こぼれただ けでしたが。

それに　しても、だれが　茶わんを　わったの でしょう、こんな　いい　茶わんを。

（ひらつか　たけじ）

『研究の意図』

材料 **「われた茶わん」** 光村出版　二年上

ひとつの対（この場合茶わんにえがかれた犬と猫）であったものが、こわれて半分ずつになってしまった。もともと、一対であった絵の犬と絵の猫が半分、即ち二分の一になり、別の対（この場合本ものの犬と猫）の半分をもってきても、そこにはひとつの対は成り立たない。話の構成に従ってその対の関係をまとめると次の通りとなる。

- 茶わんの中の描かれた犬と猫……対
（本物の犬と猫……別の対）
絵の猫・本物の犬……類似の対
絵の犬・本物の猫……類似の対
- 絵の犬と猫……対

このしくみをみぬき、ひとつの作品としてまとめる構成力が、どの学年で育ち、どのようにして、対の関係を発見して行くかをみとどけようとしたのである。

〔調査方法及び調査対象〕

原文の中より、地の文を全部カットし、会話文だけを印刷して提示した。

（指示事項）

「何かが話しています。あいた所を書きたすと、ひとつのお話になります。うまく作ってください」

学年　組　氏名（　　）

（調査対象）調査期間（昭和四六年五月〜六月）

学年 / 校名	一年	二年
相模原市 清新小	○	○
相模原市 相原小		
横浜市 上菅田小		
横浜市 三つ沢小		
横浜市 汲沢小		○

特学級	六年	五年	四年	三年
○	○	○	○	○
	○	○	○	
		○		○
		○	○	

―集計―

一年＝二〇名　二年＝三一名　三年＝四〇名　四年＝四〇名　五年＝四〇名　六年＝四〇名　計＝二一一名を対象として行った。

〔調査集計の方法〕

■何と何の会話にとらえたかによりそこに対のとり方をみとどけていくために、原文にそって、一応会話を次のような記号におきかえてみた。

（表1）（原文の各会話の後の部分は略す）

○1「ぼくが…。」
●2「わたしが…。」
○3「つまらない。」
●4「つまらない。」

◎5「ふん…。」
●6「犬さん…。」
●7「わたしが…。」
◎8「なんだって…。」
8′「おれは…。」

◉9「ふん…。」
○10「ねこさん…。」
○11「ぼくが…。」
◉12「なんだって…。」
12′「おれは…。」

○絵の犬
●絵の猫
←
◎本物の犬
●絵の猫
←
◉本物の猫
○絵の犬
←

△13「あれが…。」

○14「あんな…。」
○15「ぼくたち…。」
●16「そうよ…。」
●17「わたしたちは…。」

←
○絵の犬
●絵の猫

大きく四場面に区切ったのは、対の関係どりが四つの構成からなりたっているからである。なお、13の会話は、調査の上から必要とされなかったのでこれをはぶいた。

（表1）を、調査資料の集計のために（表2）のように整理して、四種のそれぞれの関係を明らかにした。

（表2）

記号	種別	4種
○ ●	絵の犬と絵の猫	1
● ◎	絵の猫 本物の犬	2
○ ◉	絵の犬 本物の猫	3
○ ●	絵の犬と絵の猫	4

■（表2）に従って、子どもたちが何を対としてとりどこまで構成し得るかを見るために集計を行った。

〔調査結果〕

◎先ず一年〜六年までの二一一名中原文にそった完全解答を示した者次のようであった。

（表3）

学年 / 対	1年	2年	3年	4年	5年	6年
1 ○●	0	11%	27.5%	7.5%	20%	17.5%
2 ●◎						
3 ○◉						
4 ○●						

一年では0を示しているが、これは全体的に対という意識つまり二組の組みあわせだという構成力が乏しいからであろう。但し、各場面毎の単独的な「犬・猫」「ぼく・わたし」という被我関係はおぼろげながらも捉えられているようである。三年に於いてかなり高率を示しているのは（調査校の地域差を考慮に入れるとしても）、こうした対の意識が直観的に働く学年との見方もできるわけである。これは後日検討を要する。

◎次に原文に完全解答とは云えないが、対のとり方としてはやや異ったものではあるが、話としてのつじつまがあっていたもの。細かく言うと

（表4）

対＼学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
①	0 %	6 %	0 %	2.5%	2.5%	12.5%
②						
③						
④						

②と③とを異種の対として、あるいは③は②の逆の対だとして把えることは出来るが、①と④とを関係づけることはむずかしいということである。六年生に多いのは、やはり場面ごとの関係どりにおいてその構成を完全とはいえないが見ぬく力があると言えようか。

◎対のとり方が①～③までをひとつとなし④にきてはじめて異った対に気づき一応の話の構成としてはできているもの。

（表5）

対＼学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
①	15 %	30 %	5 %	15 %	25 %	22,5%
②						
③						
④						

（表7）（⑬番が原文における構成の完全解答である）

対のパターン＼記号の意味			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	⑬	14
1	絵の犬と猫	（絵の対）														（いかなる対にも気づかない）
2	絵の猫 本物の犬	絵・本物（異種の対）														
3	絵の犬 本物の猫	絵・本物（異種の逆の対）														
4	絵の犬と猫	一が半分（になった）絵の対														
1 年												5%			27,5%	25%
2 年			3%												14%	6%
3 年				(2,5%)		2,5%		2,5%				2,5%			27,5%	17,5%
4 年						2,5% (5%)		2,5%							7,5%	7,5%
5 年						(7,5%)							5%		20%	5%
6 年						(2,5%)					2,5%	2,5%			17,5%	2,5%

（数字は部分内の完答を示す（）内の数字は他の部分はいくらか異なるが、そこだけの完答を示す）

④に於いてはじめて絵の犬と絵の猫の対がとれたということは、「それをみていた絵の犬と絵の猫とがいいあいました。」とあるのであるが、①〜④までの関係の中ではとらえていない。つまり、このとり方は、最後にきて二組の対であることにはじめて気がつき、急いでつじつまをあわせるのである。でも、一年から〜六年までこのパターンが多いことは、二組の対がこの話の中にはあるとまでは見ぬくけれども、その二組の対を交互に半分半分組み合わせてみるという話の仕組みにまでは思い至らない。しかし、この段階までなら一年生ですら15％前後までいっていることは、部分内での組み合わせ、いわば男と女、犬と猫等の単独の対から、やがて場面ごとの対関係へと発展していく道筋があるのだと教えられたことは確かである。

◎四つの対の構成であるにもかかわらずひと組としかとらえられなかったが、一応のつじつまのあっているものがみられたものをひろってみた。

（表6）

学年＼対	①	②	③	④	
	◎◉	◉◎	◎◉	◎◉	
1年					5％
2年					11％
3年					10％
4年					10％
5年					5％
6年					10％

右の表の者は犬と猫というひとつの対としてとらえ途中その犬と猫とが茶わんを相手に対話をするといった話の構成でしかとられていない。いわば相手交換はなされているが、対の半分ずつのおきかえとしての意識に浮んでこなかったということである。

◎この資料を通し、対の構成を原文（表2）にてらしてその発達をまとめてみる。

原文にてらして、四つの対の完答（部分も含む）をのみ表にした。これから伺がえることは、第一に⑬に示すように一年生には完答が0に対して、対に気づかない者が14に示すように四分の一いることであった。

次に1に示すパターンがすくないことは、文の最初から絵の犬と絵の猫という抽象化した対のとり方は、まったくむずかしいのではなかろうか。同じく2、3にも同じことがいえよう。だが4に於いては三年〜六年まで対がとれているのは、最後にきてはじめて対に気づく思考が働らき、云いかえるなら、最初からの連想が中断され、この文の構成の一部分即ち二組の対の組みあわせであることに気づいたといえよう。6にみる二組の対に気づき、異種との対、その逆の対まではとれたが、四つの対としての関係まで及ばなかったのは、部分的対応はとれるが、全体の構成はとりにくいということであろう。同じ部分内での対応でも8、9にみられる後半でのものは更らにむずかしいといえよう。7、12、に示されるパターンは、やはり0というのは、全体の関係をみぬくことの困難さを示すのではなかろうか。だが、10、をみると、一年、三年、六年にその対の関係をとらえている者がいることは、やはり子どもにとって、始めと終わりは一番視点がとまりいわゆるつじつまをあわせるということを知っている子のとらえ易い傾向といえよう。13に示すように完答の者及び部分内での対のとり方が、高学年に多いことはやはり思考の発達の段階が示されている。反対に、対ととれない者が、14に示すように一年〜六年になるに従い少数になっていることとも関係して、うなづける。

◎（表7）に示されている以外に、どのようなパターンがあるか、原文に近い順に集計を行ってみた。

（表8）

	1	2	
	◎◉	◎◉	1
	◉◎	↓	2
	◎◉	↓	3
	◎◉	◎◉	4
一年		25％	
二年	6％	30％	
三年		5％	
四年	2,5％	25％(2,5％)	
五年	2,5％	30％	
六年	12,5％	25％	

（表8）に示されている1にみられることは、二組の対及び異種との対、その逆の対、絵の犬と絵の猫との対はとっているが、この四つの対の関係は全くとられていない。2にみられるのは、二組の対はとれるが異種との対は、とれない。このとり方が一年から六年までに案外多いことは、直観的にはとれるが、その裏がえしの対どりが困難であることを示し、それは思考の転換の困難さを意味しないだろうか。逆にその困難さに志向することこそ、教育の意義があるはずとみなければならないであろう。

次に、原文は、絵の犬と猫・本物の犬と猫との二組の対からなりたっているが、いろいろな対のとり方がかなり出ていた。それ等を別表とし（表10）〜（表13）にまとめ、構成及び対そのものとり方の発達をも合わせてみることにした。いろいろと対のとり方があったので、一応記号化（X・Y）としてまとめた。どんな対をとったか（表9）の通りである。

（表9）

記号	一年	二年	三年	四年	五年	六年
X・Yとしてとった対の種類	わたし	わたし	わたし	わたし	わたし	わたし
	ぼく	少ぼく	ぼく	ぼく	ぼく	ぼく
	男	男	男	男	男	男
	女	女	女	男子	女子	女
			弟兄		男の子女の子	

— 30 —

その他対とならない	
	茶わん犬
人犬間	うさぎきつね
みんな男	ひとり他の人
犬たちみんな女	友だち
	茶わん犬
	茶わん犬

（表9）のX・Yの記号に入るものを対と認め次の表10～表13の通りにまとめられた。

（表10）

4	3	
X Y	X Y	1
◎ ◉	X ◉	2
◉ ◎	Y ◎	3
○ ●	○ ●	4
		1年
		2年
		3年
	5%	4年
2,5%	17,5%	5年
	20%	6年

（表11）

6	5
X Y	◎ ◉
X ◎	◎ X
Y ◉	◉ Y
	10%
(3%)	
2,5%	
2,5%	

（表12）

10	9	8	7
X Y	◎ ◉	X Y	X Y
◎ ◉	↓		X ◉
↓	↓		Y ◎
↓	X Y	X Y	X Y
10%			10%
	3%		12%
5%	5%		5%
2,5%		2,5%	17,5%
			12,5%

（表13）

12	11
X Y	◎ ◉
5%	5%
	23%
2,5%	12,5%
2,5%	12,5%
	5%
	17,5%

（表9）に於いて気づいたことは、一年～六年までを通して、ことばこそ異なるが、男・女という対どりをしていることであろう。これは、自然の中で第一に学びとる最初の対の意識といえよう。それは、特に（表10）～（表13）を通して、かなりの高率を示していることから、知らしめられた実態といえよう。

特におどろかされたとは、（表12）7に示されている実態であった。対どりが男・女及び本物の犬・猫との二組をみごとに四つの対の構成になしとげていて、しかもかなりの高率を一年から示していることであった。対の思考の出発が男・女からとは、全く気づかなかった面である。

整理担当　竹村房代